

英語コーパス学会 Newsletter No. 73

Dec. 1, 2011

■会長: 赤野 一郎
■事務局: 〒739-8521 東広島市鏡山 1-7-1 広島大学大学院総合科学研究科 井上永幸研究室内
■TEL: 082-424-6431 ■振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■email: inoue@v.email.ne.jp

JAECS
Japan Association for English Corpus Studies

第 37 回大会報告

■概要

英語コーパス学会第 37 回大会は、10 月 1 日（土）と 2 日（日）の 2 日間にわたって京都外国語大学で開催され、初めての 2 日間にわたる大会となりました。1 日目の土曜日はあいにくの曇り空と小雨となりましたが、2 日目の日曜日は晴天に恵まれ、合計で 130 名の参加者がありました〔会員 101 名+新入会員 3 名+当日会員 26 名〕。

今回のワークショップは「正規表現」をテーマにした 2 日間にわたるものでした。大名力先生（名古屋大学）に講師を務めていただき、これまでに正規表現を使ったことがない人を対象に、具体的な英語の表現の検索を例に、基本的な正規表現の使い方、間違いやすいポイントについて説明していただきました。1 日目は、「正規表現による英語表現の検索」と題して、参加者が実際に自分で正規表現を書き、正規表現のどの部分が対象文字列のどの部分にマッチするのかを確認しました。2 日目は、多くのエディターが共通して持っている基本的な機能を利用して、「正規表現による検索」、「ファイル一括検索（grep 検索、ワイルドカードによるファイル指定）」、「HTML などのタグの削除」、「Brown Corpus などの行頭の ID の削除」、「行の連結」などの処理の方法について学びました。2 日間で延べ 74 名の参加者を得ましたが、ワークショップの内容を反映し、2 割近くを非会員の方が占めており、こういった方法論への関心の広がりを実感させるものでした。参加者の皆様からも、「テキストデータ処理の基本的なところから大変わかりやすい内容であった。練習問題もあり、参加者は理解が深まったと思われる。」、「初級者に

も分かりやすい説明と資料、練習が充実していました。」、「よかった。素人の私でも正規表現が少しは書けるようになった。」などのように、非常に有意義なワークショップであったとの評価をいただいております。講師を務めていただきました大名力先生には、この場をお借りしてお礼申し上げます。

1 日目の大会は、まず赤野一郎会長（京都外国語大学）の開会の挨拶に続いて、開催校である京都外国語大学の久保哲男副学長より挨拶をいただきました。引き続き、清水眞先生（東京理科大学）のもと総会が行われ、会計の石川保茂先生（京都外国語短期大学）より、2010 年度会計報告及び 2011 年度予算案が示され、いずれも承認されました。大会に出席されなかった会員の皆様には決算書と予算書を同封いたしますので、ご確認ください。次に、学会賞選考委員長の深谷輝彦先生（椋山女学園大学）から学会賞の発表と選考理由の説明の後、下記のような結果が発表されました。

第 11 回英語コーパス学会賞

受賞者：家入葉子氏（京都大学）

受賞対象：Verbs of Implicit Negation and their Complements in the History of English. Amsterdam: John Benjamins, 2010.

引き続き 2 室に分かれて、石井康毅先生（成城大学）と能登原祥之先生（比治山大学）の司会のもと、それぞれ 3 件ずつの研究発表が行われました。その後、堀正広先生（熊本学園大学）の司会で、山梨正明先生（京都大学）によるご講演「認知言語学からみたコーパス言語学の展望」が行われ、66 名の参加者を得て盛況となりました。

大会 1 日目終了後の懇親会は、61 名の出席がありました。小島ますみ先生（岐阜市立女子短期大学）の軽妙な司会のもと、会長の赤野一郎先生の挨拶、そして今期で事務局長を退任する井上永幸（広島大学）の乾杯の発声で始まり、午後 8 時には懇親会を終了いたしました。

2 日目の大会は、2 室に分かれて、川崎修一先生（日本赤十字看護大学）と神谷健一先生（大阪工業大学）の司会のもと、それぞれ 2 件ずつの研究発表が行われました。研究発表の後、昼休憩を挟んで Laurence Anthony 先生（早稲田大学）の司会のもと、“Current Trends in Corpus Linguistics: Voices from Britain” と題するテーマでシンポジウムが行われました。参加者の皆さんからも、「大変面白かったです。3 様のアプローチから今後の CL の方向を考えるヒントをいただきました。Anthony 氏の司会は見事でした！」、「up to date な情報の得られる素晴らしいシンポジウムでした。」などといった、高い評価を得ました。それぞれの司会の先生にご執筆いただきました概要につきましては、「研究発表」、「講演」及び「シンポジウム」のセクションをご覧ください。シンポジウムのあと、開催校の赤野一郎先生の閉会の辞をもって、第 37 回大会の幕を閉じました。

最後に、本学会長で開催校責任者の赤野一郎先生、本学会会計で開催校の石川保茂先生、大会役員の堀正広先生、高橋薫先生（豊田工業高等専門学校）、田畑智司先生（大阪大学）、地村彰之先生（広島大学）、中尾佳行先生（広島大学）、西村道信先生（大手前大学）、深谷輝彦先生（椋山女学園大学）、小島ますみ先生のご尽力と細部にまで配慮の行き届いたご協力で今大会が盛会に終わったことを喜び、心よりお礼申し上げます。加えて大会実施に協力くださった学生、院生の方々にもこの紙上を借りて厚くお礼申し上げます。

■研究発表

certainly と *definitely* の機能的差異について

鈴木大介（京都大学大学院生）

本発表は、話者のスタンスやモダリティを表

し、類義関係にある英語の法副詞 *certainly* と *definitely* の意味機能上の違いを、コーパスにおける実際の使用例に基づいて明らかにするものである。

最初に両法副詞の違いについて、そして法副詞一般の分類記述について、主な先行研究が紹介された。先行研究の問題点として、両法副詞のはっきりした区分ができていない点が指摘された。

この問題点を解決するために、発表者は BNC における両法副詞の全生起例を抽出した。その上で法副詞と共起する要素に着目し、蓋然性に関わる要因として考えられる（1）程度副詞、（2）法助動詞、（3）否定語句の観点で分析した。さらに、機能に関わる要素として考えられる（4）生起位置の観点でも分析した。

以下、示された結論の概略を報告する。（1）の共起する程度副詞の調査の結果、*certainly* は蓋然性に関して幅広く用いられている。（2）の法助動詞との共起に関しては、*certainly* は *definitely* より広い蓋然性に関わっている。（3）の否定語句との共起に関しては、*certainly* がモダリティ領域だけでなく、否定領域とまでも幅広く関わっていると言える。（4）の生起位置に関しては、*certainly* は節頭での生起割合が一定程度あり、談話機能を担う傾向が見られる。

発表に続いて、蓋然性の強さ、幅と主観性、客観性との関係について、また spoken/written のモードの違いと両法副詞の生起頻度の関係について、質疑応答が行われた。さらに、*certainly* は真偽性の判断の段階を超えて speech act の段階に進んでいるのではないか、また中英語期などのかなり古い時代からの通時的な観点を導入することで主観性や客観性の変化がよりよく見えてくるのではないかとのコメントがあった。

石井康毅（成城大学）

前置詞の多義性とコロケーション — 認知言語学の理論に基づく句構成の分析 —

鎌倉義士（愛知大学）

本発表では、前置詞の意味はそれと共起するトラジェクター (TR)・ランドマーク (LM) の名詞句の意味的性質と密接に関連していて、TR・

LM の組み合わせから前置詞の意味が予測可能であり、また意味ネットワークの構築が可能であるということが報告された。前置詞の意味が予め多義を持っているのではなく、連語によって決定されるというのが発表者の考え方である。

最初に前置詞の多義に関する先行研究として、代表的な *over* に関する研究が概観された。次にカテゴリーとプロトタイプ, *figure/ground*, *TR/LM* といった認知言語学の基本概念が説明された。

発表者は前置詞の *TR* や *LM* の名詞句を *H* (*human*; 動物も含む), *C* (*concrete object*), *A* (*abstract entity*) の 3 種に分類し、その組み合わせと前置詞の意味との関係を調査した。具体的に触ったり見たりできるものが前置詞の最も基本的な意味と深く結びついているという前提のもとに、*TR* も *LM* もともに *C* である場合が前置詞の最も基本的な意味と、*TR* も *LM* もともに *A* である場合が前置詞の最も抽象的な意味と結びついているという仮説が示された。その上で、*ICE-GB* で *over* の全生起例を抽出し、その *TR* や *LM* が *H/C/A* のどの組み合わせであるかを調査した結果が報告された。さらに、*TR* や *LM* だけでなく動詞の意味も *over* の意味決定に関わるようだという調査結果が指摘された。

最後に、*over* と同様の手法で *into/through* についても語義のネットワーク構造を記述することが可能であるということが示された。

発表に続いて、*over* の語義と *TR* や *LM* の *H/C/A* の組み合わせとの相関の強さについて、前置詞句の意味を構成する要素の中で前置詞と名詞のいずれがより大きな役割を担っているのが表現パターンによって異なりうるという可能性について、そして *TR* や *LM* の *H/C/A* 分類時の判断の客観性の確保についての質疑応答が行われた。

石井康毅 (成城大学)

MI-score, t-score と “コロケーション”

大名 力 (名古屋大学)

本発表は、コーパス研究で広く行われている統計処理の手法や方法論について再検討することの重要性を示し、MI-score と t-score を主な対

象としてスコアの信頼性と妥当性について考察した。

最初にスコアの信頼性とは再現性 (安定性) があるかどうかを表し、妥当性とは測定したいものが測定できているかどうかを表すということを確認した。

コーパス研究において連想関係やコロケーションを数値化する際には機械で正確かつ網羅的に処理され、大規模または均衡コーパスで代表性が確保され一般化が可能であり、統計処理で偶然性が排除でき母集団に関する推定もできて、客観的で信頼性の高い分析が行えると考えられることが多いが、実はどれも問題がある。また、「連想関係」あるいは「コロケーション」と呼ばれる測定対象も複数の異なるものがあり得、測定対象が異なれば評価の仕方も当然異なるため、測定対象の定義をはっきり示すことが必要である。

発表者はこのような問題を解決するのに必要な検討項目 8 点を挙げ、うち 3 点を取り上げ説明した。第一に複数のスコアの算出方法が存在するという事、第二に用いる算出方法により得られる数値が異なるため目安とすべき基準値も当然異なるということ、第三に各スコアが何を測定するものであるのかをはっきり認識する必要があることが示された。

発表に続いて、t-score は 2, MI-score は 3 などの “コロケーション性” 判定の閾値をどう考えるべきかについて、そしてプログラムやソフトウェアの付属文書に計算式が明示されているのかということについての質疑応答が行われた。プログラムやソフトウェアのみならず論文でも計算式が書かれていないことが多く、式や計算結果の評価が何を意味しているのかを理解する必要があるということが強調された。

石井康毅 (成城大学)

学校文法に基づいた英文解析による言語データの頻度分析

田中省作 (立命館大学)

富浦洋一 (九州大学)

徳見道夫 (九州大学)

本発表は、日本人英語科学論文の質を特定す

る要因の研究をふまえ、日本の学校文法（綿貫他，2000；小池他，2003）に基づく英文自動解析システムを構築し、その頻度分析の精度を試験的に検証しようとするものである。特に今回の研究では、動詞に焦点が当てられ、良質の科学英語論文の場合は「分詞構文」「助動詞」などが多く見られ「時制」も多様であるのに対し、良質でない論文の場合は「助動詞過去を付随した受身」が多用されることが報告された。

良質の英語科学論文を科学文法ベースの視点（e.g. 品詞 n-gram JJ NN など）で解析しても検出結果を教育に直接生かすことが難しいため、研究者が学校文法の視点（e.g. 形容詞の限定用法など）で翻訳する必要が出てくる。その翻訳作業を介さず直接学校文法の視点で英語科学論文を自動解析できるよう工夫するところに研究の意義がおかれている。

試験的検証では、英文に含まれる学校文法の項目検出、項目ごとの検出精度確認、頻度補正、の手順がそれぞれ丁寧に報告された。例えば、“*Being tired, he sat down to rest.*” に対し、文頭 *Being . . . sat* の範囲から「分詞構文」、次の *sat . . . rest* の範囲から「TO 不定詞（副詞的用法）」などの学校文法の項目が検出され、*Being tired, sat, rest* といった動詞情報から「態」「時制」「相」などの項目が検出されることが示された。また、検出精度に関しては、再現率（どれだけもらさず検出できているか）と適合率（検出したものがどれだけ正確か）の 2 つの指標が紹介された。

質疑応答では、研究対象となる英語科学論文のジャンルをどの程度まで広げる予定か、ジャンル別に英文の質が異なるのをどう扱うべきか、分析単位（言語特徴）をどのように設定すべきか、などの問題で意見が交わされた。

能登原祥之（比治山大学）

英和辞典のシノニム記述に関する考察 —Sketch Engine を用いて—

吉村由佳（東京理科大学非常勤講師）

本発表は、コーパスを基盤とした語義記述研究を進め、日本人英語学習者の立場に立つ学習英和辞典独自のシノニム記述法を探究しようと

するものである。共通のプラットフォーム Sketch Engine 上の日本語（Jp）と英語（uk）双方の WaC（Web as Corpus）データを丁寧に観察し、日本人英語学習者が知りたいと思うシノニムの使い分けを学習英和辞典の語義や例文に示そうとするところに研究の意義がおかれている。

今回は、特に名詞 *smell* に代表されるシノニム（e.g. *smell, scent, fragrance, aroma, odor* など）に焦点が当てられ報告された。発表では、まず、今までの一般的な学習辞典の記述法（可算性、語義、使用域、共起語、用例など）が概観され問題点が指摘された。次に、Sketch Engine の Word Sketch と Concordance 機能を駆使し *smell* における共起語環境の観察結果から各シノニムの特徴的な振る舞いについて詳細な解釈が報告された。そして、現在の学習辞典が抱える問題点として、(1) *smell* に代表される語に与えられている従来の可算性の記述が不十分であること、(2) シノニム間で共起する動詞や形容詞などに明らかな差異が見られること、(3) 訳語の中には語義説明として不十分なものがあること、(4) 英語と日本語の統語構造の差を考慮した記述が有効であること、の 4 点が指摘された。最後に、*smell* の場合で、学習英和辞典における効果的な記述法（特に語義と例文）が具体的に提案された。

質疑応答では、特にデータの頻度情報の見方や解釈について意見が交わされた。その中で、頻度情報で明確にならない部分をいかに研究者の主観で解釈していくかが課題との指摘もなされた。最後に、日本語（JpWaC）に装備されている茶筌（形態素解析器）のタグ付与にも限界があるとの声も聞かれた。

能登原祥之（比治山大学）

CEFR Level Marker の開発：英語到達度指標研究のコーパス言語学的展開

投野由紀夫（東京外国語大学）

金田拓（東京外国語大学大学院生）

土肥康輔（東京外国語大学大学院生）

本発表は、言語情報を基にヨーロッパ言語共通参照枠 CEFR の 6 段階のレベル（基礎レベル

A1/A2, 自立レベル B1/B2, 熟達レベル C1/C2) を判別するツール CEFR Level Marker を開発し, その判別精度を検証したものである。この Level Marker を通して, 様々なシラバス, 教材, そして学習者コーパスなどのレベルを判別し, CEFR を志向する英語教育へ基礎的資料を提供することに本研究の意義がおかれている。

発表では, まず, T-series Data Base (A1 Break-through, A2 Waystage, B1 Threshold, B2 Vantage, など各 CEFR レベルの機能・言語特徴のリスト) の作成手順が紹介された。次に Level Marker によるレベル判別例が示された。例えば, *He won't be here till three o'clock.* という言語情報から, レベル (Threshold), 概念・機能 (GN: General Notion), 番号 (3/3.4), カテゴリー (temporal/duration), 言語特徴 (*not... till*), レベル間の重複 (Vantage) など, 判別結果が示される過程が紹介された。さらにプログラム言語 ruby を使って, T-series Data Base (e.g. *to open*) を基にテキストから該当表現を抽出する抽出用正規表現リスト (e.g. $\text{¥b(open|opens|opening|opened)¥b}$) が自動で作成されるシステムが報告された。最後に, 言語表現, CEFR レベル, 正規表現, の 3 種類で検索可能なオンライン検索システムが公開され, Cambridge Exam の CEFR レベル別リーディングセクション, 中学校英語教科書 (New Horizon), 高等学校英語教科書 (New Crown) を題材にレベル判別作業のデモが行われた。

質疑応答では, エラーが含まれる学習者コーパスを判別する場合はどうなるのか, 正規表現を使ってどこまで詳細に判別していくのか, Level Marker は技術的に文処理をどのように行っているのか, などの点で意見が交わされた。最後に, Level Marker はレベル判別のみならず, 概念・機能の視点でも検索できることから, さらなる利用可能性について発表者から説明があった。

能登原祥之 (比治山大学)

英語構文における “to-be 削除” の大規模コーパス分析
— 願望動詞の補文に生起する形容詞の意味パターン
比較を中心に —

澁谷竜昇 (大阪大学大学院生)

本発表は, 英語の願望動詞 (e.g. *want, wish*) の補文における “to-be 削除” (*to-be deletion*) を取り上げ, この現象が意味的に動機づけられているという認知文法の枠組みにおける提案の妥当性を, 大規模コーパス分析によって実証する研究である。

大規模コーパス The Corpus of Contemporary American English (COCA) より用例を採集し, 願望動詞を主動詞に取る事例を因子分析の手法を用いて統計的記述を行った上で, *to be* が生起する to 不定詞節補文 (INF) の場合 (e.g. *I want him to be happy.*) と, *to be* が生起しない小節補文 (SC) の場合 (e.g. *I want him happy.*) では, 共起する形容詞の分布が異なることを示した。具体的には, INF パターンを特徴づけている因子として, 肯定的意味合いを含意する形容詞が観察され (e.g. *able, happy, safe, successful, honest*), かつこれらの多くが段階的形容詞 (gradable adjective) であることが確認された。一方, SC パターンを特徴づけている因子として, 非段階的形容詞 (non-gradable adjective) (e.g. *dead, alive*) が上位に観察された。

INF パターンと SC パターンに生起する形容詞の意味的傾向性が異なるという上記の統計結果によって, 既存理論との整合性が明らかにされた。すなわち, 両補文の成立が意味的に動機づけられており, 両補文パターンの差異は「事態の時間幅の有無」によって特徴づけられるという, Langacker に代表される認知文法の主張を部分的にはあるが支持する結果となっていることが示された。

質疑応答においては, 願望動詞に限らず他の動詞も含めたより包括的な検証の必要性等が指摘されたが, 本発表は, 認知言語学等の理論言語学の研究成果をコーパスを用いて計量的に検証するという, 近年注目されている研究手法に意欲的に取り組んだ研究であった。

川崎修一 (日本赤十字看護大学)

英語形容詞の使用 — 構文との関係 —

澁谷良方 (京都外国語大学)

本発表では, 次の 3 つの用法 (構文) におけ

る英語形容詞の使用について、量的手法による分析結果が報告された：(1) 限定用法（前置修飾形容詞構文 e.g. *a warm autumn*）, (2) 叙述用法（複合自動詞形容詞構文 e.g. *I'm not very tall.*）, (3) 叙述用法 II（複合他動詞形容詞構文 e.g. *That makes me angry now.*）。

まず、英語形容詞の使用（分布）に関する事実として、同一の形容詞であっても、用法が異なれば生起頻度も異なることを指摘した上で、このような用法間に見られる生起頻度の差異に関し次の 2 点が主張された：[1] 形容詞の使用は、生起する用法（構文）と強い関連性を持つ、[2] したがって、このような分布上の違いを説明するためには、構文の特性を明らかにしなければならない。

ICE-GB を用いて標本作成を行った上で全データから 10% を無作為抽出し、フィッシャーの正確確率検定を通じて、構文を特徴付ける語として 97 個（1,596 個中）の形容詞（タイプ）を抽出。さらに、これら 97 の特徴語について ICE-GB 全体での生起頻度および各構文での生起頻度を測定し、各構文における形容詞の関連性の強さの度合いを明らかにした。そしてこの解析結果から、構文間における形容詞の意味タイプの違いは、各構文との意味的整合性の違いを反映しており、各構文における形容詞の生起分布の違いは、各構文との意味的整合性の違いの反映であることが示唆された。

結論として、本研究の示唆する構文的アプローチによって、形容詞の用法に関して、関連する構文の特性を捉えることが重要であり、また構文間の形容詞の分布の違いが説明できるといふ、上記 2 点の主張が統計的にも検証された。

なお、質疑応答では、レジスターの問題や Collostructional analysis が抱える技術的な問題などについて話し合われた。

川崎修一（日本赤十字看護大学）

OED, インフォーマント, 頻度に基づく英語オノマトペ語彙の抽出

菅原崇（岐阜工業高等専門学校）

日本国内における英語オノマトペ研究はそれ

ほど盛んではなく、収集基準を明確にした信頼度の高い英語オノマトペリストはこれまで存在していなかった。諸外国に目を向けても、伝統的にオノマトペは周知的で幼稚な現象とみなす傾向があった。先行研究には改田 et al. (1985), Kloe (1977), Taylor (2006) などがあるが、これらにはオノマトペの収集基準が明確でない、データがコミックという限定されたジャンルである、著者の直観に基づく見解で数量データが示されていないといった問題点があった。

本発表では当日配布資料として OED に基づく 287 語のオノマトペをリスト化したものが提示された。従来、英語オノマトペは動詞が一般的であると言われてきたが、当該リストを品詞分類した結果、先行研究の言及に合致することが検証された。続いて 5 名のインフォーマントによる 4 段階評価から「よりオノマトペらしい語」55 語が抽出された。さらにこの 55 語を LLC/LOB コーパスでの頻度を求め、話し言葉・書き言葉で高頻度な「よりオノマトペらしい語」が抽出された。同様にここで抽出された語も動詞である割合が高いことが証明された。

今後の課題としてリスト作成と語彙研究面での課題が示された。質疑応答では OED に収録されない幼児語や絵本に出てくる押韻のためのオノマトペの扱いや、インフォーマントによる判断が分かれることがある点をどのように扱うかなど、活発な議論が行われた。

神谷健一（大阪工業大学）

統計的対訳表現抽出を利用した英日バイリンガルコロケーションリストの構築

後藤一章（摂南大学）

近年、英語学習におけるコロケーションの重要性が注目されている。本発表ではモノリンガルコロケーションリストは語彙量の少ない学習者にとって扱いづらいという問題意識から、有用な学習リソースの開発を目指し、言語解析技術を用いてパラレルコーパスから多量の英語コロケーションを抽出、さらに対訳を機械的に付与するという実験的手法について紹介が行われた。

予稿原稿時点では対象とするパラレルコーパ

スとして「Wikipedia 日英京都関連文書対訳コーパス」が計画されていたが、コロケーション収集時にいくつかの問題が見つかったことから、新聞記事データを出典とする JENAAD に変更された。本発表で対象となるコロケーションは「動詞＋名詞」であり、英文では Machineese Syntax, 日本文では KNP が解析器として用いられた。統語解析済みデータは Perl 言語で処理され、英語コロケーションデータと日本語格フレームデータが抽出された。日英の意味的な対応づけを行う統計的な手法には「重み付き Dice 係数」による出現パターンの類似度計算が採用され、その精度は約 85%であった。このような手法で作成された英語出現頻度順 1 位～100 位の英日バイリンガルコロケーションリストが当日資料として配布された。

質疑応答では JENAAD を採用したことによる文脈依存の問題や、初・中級学習者に有用なリストにするための工夫、アプリケーション化への要望など活発な議論が行われた。

神谷健一（大阪工業大学）

■招待講演

認知言語学からみたコーパス言語学の展望

山梨正明（京都大学）

本講演の趣旨は、日本認知言語学会会長及び日本語用論学会会長をされている講師の視点、特に認知言語学の視点からコーパス研究に対する見解や提言を拝聴することだった。

講演の前半では、認知言語学と形式文法との違いを説明され、認知言語学の基本的な考え方を概説された。次に、認知言語学の用法基盤のアプローチの特徴を以下の 5 つにまとめて説明された。(i) 語彙レベル、文レベルから談話レベルの自然発話を分析対象として重視する、(ii) 質的分析だけでなく、事例のトークン頻度、タイプ頻度、等の量的分析から言語現象の一般化を試みる。(iii) 典型事例と周辺事例を、個々の言語使用者の変異、ゆらぎ、等を含めて相対的に分析する。(iv) 形式文法のトップダウン的アプローチではなく、言語使用を重視するボトムアップ的アプローチを前提とする。(v) 経験基盤主義の観点から、言語的知識を、ダイナミッ

クな言語運用の発現として創発的に規定していく。

講演の後半では、科学的哲学的視点から見た理論言語学の批判的な検討を行い、言語研究における計量的、統計的データの重要性を述べられた。

講演の中では、随所に認知言語学とコーパス研究の間の新たな研究の可能性を示唆された。たとえば、スキーマという概念においてプロトタイプが頻度において最も高いか、比喩表現における双方性で対になる表現（例、「頭が かたい/やわらかい」）や双方性で意味が対にならない表現（例、「口が おもい/かるい」）は、頻度にはないか、さらに認知言語学で論じられる共時的・通時的な問題に関して、計量的な視点は十分に研究の余地があること等を指摘された。

講師は、理論言語学の研究では、生成文法を中心とする形式文法の影響により、コーパス言語学と理論的な視点からみた言語学の交流は積極的にはなされてきていないが、近年、認知言語学の研究の進展に伴い、コーパス言語学と理論的な視点からみた言語分析の関係が積極的に見直されつつある、という認識から、日本認知言語学会と英語コーパス学会の積極的な交流を提言されて講演を締めくくられた。

堀正広（熊本学園大学）

■シンポジウム

シンポジウム《Current Trends in Corpus Linguistics: Voices from Britain》

Introduction

司会 Laurence Anthony（早稲田大学）

Many important developments in modern corpus linguistics can be traced back to work initiated at leading British institutions, in particular the University of Birmingham, Lancaster University, and the University of Nottingham. By reviewing the past and present work at these institutions, and foreseeing the future directions of their many-faceted research projects, it is possible to gain a deeper understanding of the history, current issues, and future possibilities of corpus linguistics research. This symposium was organized

with the aim of achieving these goals.

As moderator, I opened the symposium with a brief discussion on why British institutions have played such a significant role in corpus linguistics. Quoting eminent researchers such as Geoffrey Leech, I explained that pioneering corpus linguists in Britain were not constrained by the traditional views of grammar held by members of the generative school. Rather, they had a healthy relationship with dictionary publishers and a wealth of both written and spoken corpus data that could provide them with insights into authentic language use. I then introduced the three speakers of the symposium, who explained the past, present, and future directions of work carried out at their respective institutions. Finally, I invited the members of the panel and audience to discuss some of the ongoing issues and controversies in corpus linguistics, including, “Should corpora always be big?” “Should corpora include annotation and markup?” and “Should corpus linguists develop programming skills?”

Corpus Linguistics at the University of Birmingham 講師 仁科恭徳 (立命館大学)

In this presentation, I first summarized the historical and recent corpus studies carried out at the University of Birmingham, prioritizing how they have utilized corpus linguistic approaches to the identification of meaningful language phenomena (e.g., units of meaning) from authentic texts. In particular, I explained that the purpose of such research is fundamentally qualitative in nature. Next, using some of my own research findings, I explained how corpus linguistics and discourse analysis harmonize with one another and how this combination is an effective approach to identify the link between language and (academic) culture. Above all, I highlighted the fact that the primary essence in the Birmingham school of corpus linguistics—namely, a word or a sequence of words is always contextual—still lives in many of the current studies carried out at the institution.

Corpus Linguistics at Lancaster University 講師 高橋 薫 (豊田工業高等専門学校)

In this presentation, I first addressed the historical trends in the Department of Linguistics and English Language at Lancaster University. Here, I focused on four points: 1) the faculty, 2) their work, 3) the University Centre for Computer Corpus Research on Language (UCREL), and 4) the British National Corpus (BNC). Next, I discussed some of the important trends in research that have emerged from the Summer School in Corpus Linguistics, touching upon some of the strengths and drawbacks of the BNC. I finished the presentation by offering my opinion on the future of corpus research at Lancaster University.

Corpus Linguistics at the University of Nottingham 講師 Michael Handford (東京大学)

In this presentation, I first offered a brief background to two of the most prominent researchers at the University of Nottingham, Ronald Carter and Mike McCarthy, explaining that they were both mentored by John Sinclair at the University of Birmingham. Next, I summarized the major findings and applications of research at the University of Nottingham, and described how many successes have been the result of collaborations with researchers in other disciplines and/or joint projects with professional organizations such as Cambridge University Press. In the second half of the presentation, I described my own research on the development and applications of the Cambridge and Nottingham Spoken Business English Corpus (CANBEC). Here, I briefly discussed the difficulties of collecting authentic discourse of professionals at work, and also showed some of the interesting results that this data reveal about language use and social relationships in a business context.

第 38 回大会研究発表者募集

2012 年度大会 (第 38 回大会) は 9 月 29 日 (土) 及び 30 日 (日) に大阪大学で行われる運びとなりました。つきましては、発表を希望される方は、下記の要領に従って email で事務局宛にお申し込み下さい。

【分野】 本学会にふさわしい、コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた英語研究。

【応募資格】 本学会員であること。

【発表方法】発表 20 分，質疑 10 分。

【応募方法】冒頭に題名のみを記し，800 字～1200 字（参考文献は別；具体的内容をわかりやすく示すこと）にまとめ，メール本文に氏名（ふりがな），所属・職名，住所，電話番号，メールアドレス明記。

※審査の際，応募者が特定されないよう，事務局が応募書類を加工させていただくことがあります。

【応募締め切り】2012 年 6 月 30 日（土）必着

【採否決定】2012 年 7 月下旬（予定）

【問合せ】〒739-8521 東広島市鏡山 1-7-1

広島大学大学院総合科学研究科

井上永幸研究室内

英語コーパス学会事務局

email: inoue@v.email.ne.jp

ハンドアウトのダウンロードサービス

Susan Hunston 氏講演会及び第 37 回大会で配布されたハンドアウトを希望される会員に対して，ダウンロードのサービスを行います。期間は，このニューズレターお届けより 12 月 31 日までとします。ファイルは PDF となっております。ご希望の方は，石川保茂 (yasuishikawa@hotmail.com) まで下記のハンドアウトのうちご希望の番号をお知らせください。追って URL をお知らせいたします。

なお，発表者の著作権保護の立場から印刷は「許可しない」に設定してあります。

※以下，講師・発表者の敬称は略させていただきます。

- 0 Susan Hunston “Corpus Approaches to the Study of Evaluation”
- 1 鈴木大介「certainly と definitely の機能的差異について」
- 2 鎌倉義士「前置詞の多義性とコロケーション — 認知言語学の理論に基づく句構成の分析 —」
- 3 大名力「MI-score, t-score と “コロケーション”」
- 4 田中省作・富浦洋一・徳見道夫「学校文法に基づいた英文解析による言語データの頻度分析」

- 5 吉村由佳「英和辞典のシノニム記述に関する考察 — Sketch Engine を用いて —」
- 6 投野由紀夫・金田拓・土肥康輔「CEFR Level Marker の開発：英語到達度指標研究のコーパス言語学的展開」※まだ正式な論文としては書かれていないため，ハンドアウトは個人的な資料としてのみお使いください。
- 7 山梨正明「認知言語学からみたコーパス言語学の展望」
- 8 澁谷竜昇「英語補文における “to-be 削除” の大規模コーパス分析 — 願望動詞の補文に生起する形容詞の意味パターン比較を中心に —」
- 9 渋谷良方「英語形容詞の使用：構文との関係」
- 10 菅原崇「OED, インフォーマント, 頻度に基づく英語オノマトペ語彙の抽出」
- 11 後藤一章「統計的対訳表現抽出を利用した英日バイリンガルコロケーションリストの構築」
- 12 Anthony, Laurence・仁科恭徳・高橋薫・Michael Handford “Current Trends in Corpus Linguistics: Voices from Britain”

新入会員紹介（11 月 25 日現在，S は学生）

Cunningham Stuart	Kwansei Gakuin University
伊藤亮太	法政大学大学院 S
大森 誠	松江工業高等専門学校
大和田和治	東京音楽大学
勝部愛美	大妻女子大学大学院 S
木山直毅	大阪大学大学院 S
藏蘭和也	関西学院大学大学院 S
澁谷竜昇	大阪大学大学院 S
渋谷良方	京都外国語大学
菅原 崇	岐阜工業高等専門学校
永松里和	大阪大学大学院 S
松井 涼	関西学院大学大学院 S
村田万里	明星大学大学院 S
森下裕三	神戸大学大学院 S



Susan Hunston 氏講演会報告

Corpus Approaches to the Study of Evaluation

Susan Hunston (The University of Birmingham) バーミンガム大学の Susan Hunston 教授の講演会が、大学英語教育学会関西支部協力のもと、11月26日(土)午後2時30分からキャンパスプラザ京都で行われた。55名(会員33名,非会員22名)の参加者を得て、田畑智司先生(大阪大学)の司会で、報告者が教授の紹介をした後、80分の講演、その後の30分の活発な質疑応答で、盛況のうちに2時間の講演会は終わった。講演内容の概要は以下の通り。ただし、紙幅の関係ですべての内容を紹介できず、また説明不足や報告者の誤解があるかもしれない。不備があるなら、すべて報告者の責任である。

Hunston 教授は事物や事態(教授の用語では target)に対する話し手あるいは書き手の態度・見解・感情などの主観的反応である「評価」(evaluation)が、いかなる言語資源を用いて表出されるかという問題を慣用連語 (phraseology) の観点から、(1) modal-like expressions, (2) semantic sequences, (3) expressions of intensity, (4) local grammar の4つの事例を取りあげ、コーパスに基づく分析結果を示しながら詳細に論じられた。

教授は最初に、evaluation 自体は様々な言語資源が互いに連携し効果を発揮する累加的な (cumulative) ものであり、多くの場合その源を明確に指摘できず暗示的 (implicit) であり、様々な関連概念 (e.g. stance, subjectivity, modality, judgement, appraisal, sentiment, etc) と重なり合っていること、また言語資源のリストに終わりがなく (open-ended), 意味は一定せず



(unstable), 文脈に依存していることを指摘された。

本論では、第1に評価が話し手・書き手の心的態度の表明に近いため、モダリティーに類似した表現 (modal-like expression) となって具現し、その例として、

義務と重要性を表す *the task of, the importance of*, 可能性や困難さを表す *help N to, have yet to, no way of*, 意志を表す *with the aim of, attempt to* などをあげられた。この種の表現は無数にあり、文法的に多様だが、その多くは構成要素に *of* か *to* 不定詞が含まれており、したがって動詞の原形あるいは動名詞と共起する傾向にあること、優先的に特定の動詞と共起し、*wh-*節を従える頻度が極めて高いことなど、興味深い指摘がなされた。教授は *find out* を例にコーパス分析から *to + find out + who/how/whether* が典型的な連語で、この慣用連語が生起するコンテキストは、意味的に「義務・努力 + *find out* + 未知の情報」を共有していることを提示された。

第2に評価と「意味的連鎖」(semantic sequence) の関係を論じる。意味的連鎖とは、形式的には多様だが、一定の意味要素が連なり繰り返して生起する句のことで、lexical bundle, unit of meaning, formulaic sequence など、テキスト内に見られる規則性を説明するための概念に、Hunston (2008) が新たに加えた概念である。上述の *find out* で例示した「義務・努力 + *find out* + 未知の情報」がそれにあたるが、教授は *the idea that, the conclusion that, the discovery that* などの「名詞+同格節」を取りあげ、コーパス分析からそれぞれの典型的な意味的連鎖を抽出する。意味的連鎖の分析はつまるところ、核となる語 (e.g. *idea, conclusion, discovery*) について何が典型的に語られか (what is often said about) を分析していることになる結論づける。

評価と慣用連語の関係において3番目に取り



あげられたのは、評価の強さ (intensity) の問題である。評価を強める手段として、より意味の強い語の使用 (e.g. *good* → *excellent*, *bad* → *terrible*) や強意副詞による修飾 (e.g. *very good*, *extremely bad*) があるが、多くの慣用連語もその機能を果たす。否定的評価の強さを高めるものとして、*a fair dose of (misery)*, *to the point of (tragedy)*, *a time of (crisis)* などがある。興味深いのは、いずれの句にも前置詞 *of* が含まれていることである。この言語事実を利用すれば、*of* をとっかかりさらに評価の強意句を見いだすことができる。教授は *of tragedy* を例に取りあげ、その左側に生じる共起語を精査することで、*in the face of (tragedy)*, *the seeds of (tragedy)*, *in the midst of (tragedy)* などの評価の強さを高める慣用連語をあぶり出す。

最後に、教授は言語全体を記述する一般文法 (general grammar) では記述しきれない言語事実を適切に記述する local grammar の立場から、評価と慣用連語の関係を、local grammar の 1 つとして教授が提唱する pattern grammar の観点から論じる。pattern grammar では「パターンが共通する語は同一の意味グループに属する」と言う考え方がある。教授は形容詞のパターンを取りあげ、時には補文タイプが異なることがあるものの、パターンと意味に対応関係があり、一定のパターンが一定の評価を表すための言語資源であることを、詳細な分析事例をもとに説得力ある語り口で説明された。

参考文献

Hunston, S. (2008) "Starting with the small words: Patterns, lexis and semantic sequences." *International Journal of Corpus Linguistics* 13: 271–295.
付記 Hunston 教授の公開講演会が実現したのは、大学英語教育学会関西支部長である野口ジュディー先生 (武庫川女子大学) が、支部設立 40 周年記念大会に同教授を招聘されることになり、当学会でも講演会を開いてはどうかというお申し出があったからです。このお申し出がなければ今回の講演会は実現しませんでした。先生のご厚意に対して深くお礼申し上げます。また来日された教授が帰国されるまでのすべての世話をしてくださった、鎌倉義士先生 (愛知

大学), 仁科恭徳先生 (立命館大学) にも厚くお礼申し上げます。

赤野一郎 (京都外国語大学)

会誌『英語コーパス研究』第 19 号について

『英語コーパス研究』第 19 号 (2012 年刊行) について報告いたします。2011 年 9 月末に締め切りの、本年の会誌への投稿数は、研究論文 7 点、研究ノート 1 点、シンポジウム論文 1 組でした。昨年とほぼ同数の原稿が寄せられたこととなります。現在、編集委員および論文査読委員による厳正な査読審査が行われております。『英語コーパス研究』は例年 9 月末日が投稿の締め切りです。本年度投稿に至らなかった論文等をお持ちの会員の方々は、来年度の投稿へ向けて是非ともご検討をお願いいたします。研究論文、研究ノートのみならず、書評やコーパス紹介、ソフトウェアレビュー、実践報告なども受け付けております。学術的水準も高く、かつ多くの会員諸氏にとって有益な情報をもたらす会誌としたいと願っております。多くの投稿をお待ちしております。なお、今号には 2011 年 10 月 1 日～2 日に京都外国語大学で開催された第 37 回大会の初日に「認知言語学からみたコーパス言語学の展望」のタイトルでご講演をいただいた京都大学の山梨正明先生からのご寄稿論文を掲載する予定でおります。『英語コーパス研究』第 19 号にどうぞご期待下さい。

続きまして、『英語コーパス研究』第 20 号の原稿を次の要領で募集いたします。会員各位の積極的な投稿をお待ちしております。

【原稿の種類】

1. 英語コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた「研究論文」、「研究ノート」、「実践報告」
2. 「書評」、「コーパス紹介」、「ソフト紹介」、「海外レポート」、「論文紹介」などの各種情報あるいは紹介原稿

【投稿申込締め切り】2012 年 7 月 30 日 (月)

氏名、所属、原稿の種類とタイトルを下記原稿提出先まで電子メールにてお知らせください。

【原稿提出締め切り】2012 年 9 月 30 日 (日)

提出方法等についての詳細は学会 Web ページ

(<http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/>) を参照してください。

【問い合わせ先・原稿提出先】

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41
東北大学・大学院国際文化研究科 岡田 毅

TEL: 022-795-7632 FAX: 022-795-7632

Email: t-okada@intcul.tohoku.ac.jp

【原稿の長さ】

1. 研究論文

和文：A4 サイズ 1 ページあたり 35 字×30 行，17 枚以内

英文：A4 サイズ 1 ページあたり 70 ストローク×35 行，17 枚以内（10.5 ポイント使用）

※いずれも Abstract（英文），図表，注，書誌，付録を含む

2. 研究ノート

1 ページあたりは上記の書式と同様で，12 枚以内

※いずれも Abstract（英文），図表，注，書誌，付録を含む

3. その他

研究論文の半分以下

【書式】

第 19 号所収の論文を参考にしてください。詳細は学会 Web ページ (http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/Guidelines/ECS_SGuide-j.pdf) でご確認ください。

【採用通知】 2012 年 11 月下旬

【刊行予定】 2013 年 5 月

なお，投稿申込（7 月末締切）への応募の有無に関わらず，9 月末の原稿締め切りまでに投稿頂ければ，会誌への投稿は可能です。

『英語コーパス研究』編集委員会委員長
岡田 毅（東北大学）

会誌『英語コーパス研究』第 18 号（2011）における修正について

投稿者のお一人である田中省作氏（立命館大学）より，以下のような修正のお申し出をいただきましたので，お知らせします。

【誤】 ※p. 110.

大石力（2010）「コーパス検索で注意すべきこと－基礎データの信頼性向上のために」英語

コーパス学会第 35 回大会。

【正】

大石力（2010）「コーパス検索で注意すべきこと－基礎データの信頼性向上のために」英語コーパス学会第 35 回大会。

理事会の決定事項について

9 月 30 日（金）17:30 よりキャンパスプラザ京都で開かれた理事会におきまして，以下の議案が審議されました。

■人事について

(1) 次期会長その他の人事について

理事会後のメールによる審議も含めて，以下のような人事が提案され承認された。

会長：堀正広先生（熊本学園大学）〔現副会長〕

副会長：投野由紀夫先生（東京外国語大学）

事務局長：田畑智司先生（大阪大学）

会計：小島ますみ先生（岐阜市立女子短期大学）

現会長の赤野一郎先生（京都外国語大学）には 2 期にわたる会長職，会計の石川保茂先生（京都外国語短期大学）には正式な会計職発足前からの事実上 3 期にわたるお仕事，誠にお疲れ様でした。事務局長を仰せつかっておりました私，井上永幸も，会長交代を機に，退任させていただくこととなりました。新会長の堀先生，新副会長の投野先生，新事務局長の田畑先生，新会計の小島先生，よろしくお願ひいたします。

(2) 理事の新任・退任について

退任：朝尾幸次郎先生（立命館大学）〔編集委員もご退任〕

新任：石川保茂先生（京都外国語短期大学）

朝尾先生，長い間お疲れ様でした。石川先生，今後は理事としてよろしくお願ひ申し上げます。

(3) 編集委員の補充について

編集委員：中尾佳行先生（広島大学）〔補充〕

中尾先生，大変なお仕事ですが，よろしくお願ひ申し上げます。

■Web による会員管理について

Web による会員管理について，以下のことが審議され，了承された。

・ PayPal™ 使用の場合，会費 5,250 円とする。

・郵便局の払込取扱票を、赤色から青色に変更する〔払い込み者が手数料負担〕。

・PayPal™管理費は学会が負担する

・PayPal™使用による払い込みは、手数料 250 円を明記する。

・海外会員については、別途審議とする。

■20周年記念大会準備委員会について

英語コーパス学会は 2012 年に 20 周年を迎えるが、そのための記念大会準備委員会が発足された。

委員長：堀正広先生（熊本学園大学）〔新会長〕

委員：岡田毅先生（東北大学）、滝沢直宏先生（名古屋大学）、田畑智司先生（大阪大学）、投野由紀夫先生（東京外国語大学）、深谷輝彦先生（椋山女学園大学）。

また、同趣旨の大会記念出版物編集委員会の設置が承認された。

■言語系学会連合加盟について

言語系学会連合〔言語に関する正しい知識と理解を一般社会に浸透させ、個人や単一学会レベルを超えて学術的な言語研究の重要性を発信していくことを目的とする〕への加盟手続きが終了した旨、報告がありました。

東支部活動予定・報告

東支部では去る 7 月 9 日に実施した課題別シンポジウムに続き、以下の要領で 3 月にシンポジウムを予定しています。詳細は後日、メーリングリストでもご案内します。

■東支部課題別シンポジウム

テーマ：コーパス分析と辞書・語彙教材開発

日程：3 月 18 日午後 1 時～5 時（予定）

場所：都内（成城大学または東京外国語大学を予定）

主催：英語コーパス学会東支部

コーディネーター：石井康毅（成城大学）

入場無料

発表者（予定）：石井康毅（成城大学）、内田諭（東京外国語大学）、大羽良（中央大学）・小林雄一郎（大阪大学大学院・日本学術振興会特別研究員）、投野由紀夫（東京外国語大学）

概要：コーパスを辞書編集に活かすという取り組みは既に当然のこととして行われるように

なってきた。特に、執筆者がコンコーダンスラインやコロケーションの頻度データを見ながら定義・用例・語法等を執筆するというコーパス利用の形態は徐々に広まってきている。しかし辞書の執筆者が必ずしもコーパスの利用に関して十分な知識を持っているわけではなく、また独自にコーパスを処理して一般的なツールでは得られない情報を抽出するための技術を持っていることも稀である。そのため、コーパスデータを何らかの形で処理して得られる結果は専門の担当者がコラムなどの形で別途注記として加えることも多い。このデータ処理と執筆をもう少し深いレベルで統合することで、コーパスから得られる知見を辞書の記述により深いレベルで反映し、記述の質を高められると考えられる。本シンポジウムでは、前半のセッションで、コーパスやその他の言語データ資源から直接的にデータを引き出し、それを辞書や英語学習教材の制作に活かすという実践の経験を持つ若手の発表者が、様々な手法や遭遇した問題、今後の展望などについて発表する。後半のセッションは、発表者と参加者との議論を通して、コーパスを辞書執筆、英語学習教材製作、さらには広く英語教育一般により広く深く活用していく可能性について考える場としたい。

東支部長

投野由紀夫（東京外国語大学）

Susan Hunston 氏名誉会員に



Susan Hunston 氏に赤野一郎会長より名誉会員証が授与された

11 月 26 日に京都でご講演いただきましたバミンガム大学教授 Susan Hunston 氏に名誉会員になっ

ただくことが了承されました。

今後の大会日程と開催校

第 38 回大会	2012 年 9 月 29, 30 日	大阪大学
第 39 回大会	2013 年 10 月	東北大学
第 40 回大会	2014 年 10 月	熊本学園大学

事務局から

◇会費納入のお願い

2011 年度会費（一般 5,000 円，学生 3,000 円）を、日本郵便にある払込取扱票を使ってお納めいただきますよう、ご協力をお願いいたします〔振替口座：00940-5-250586〕。日本郵便発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきますので、ご了承ください。別途領収書が必要な方は、80 円切手を同封の上、石川保茂（〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6 京都外国語大学）までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。

過年度会費未納の方は、2010 年度分と併せてお納めください。会誌『英語コーパス研究』第 18 号は 2010 年度の会費を納入していただいた方のみ、送付いたしております。また、2 年続けて会費未納の場合、Newsletter などの送付を中止させていただきます。

住所、所属などに変更や異動のある方は、必ず払込取扱票の通信欄にお書き添えください。

※会員の皆様には、日頃より会費の当該年度内納入のご協力をいただきまして、お礼申し上げます。会費を滞納されますと、退会時に滞納分をまとめてお支払いいただくといった事態にもなりかねません。会員の皆様におかれましては、円滑な学会運営のためにご協力いただけましたら幸いです。なお、退会を希望される場合は、少なくとも 4 月 30 日までに事務局までお知らせくださいますようお願い申し上げます。

◇メーリングリストについて

英語コーパス学会ではメーリングリストを使って会員の皆様の様々な情報交換に役立てていただいているところですが、最近、宛先不明でエラーが返ってくる例も増えています。会員の皆様方には、メールアドレスに変更が生じた

場合、速やかに事務局宛ご連絡いただけますようお願い申し上げます。

◇寄贈刊行物の紹介

堀正広（2011）『例題で学ぶ英語コロケーション』研究社。〔堀正広氏より〕

磐崎弘貞（2011）『英語辞書をフル活用する 7 つの鉄則』大修館書店。〔磐崎弘貞氏より〕

Yoshida, Etsuko (吉田悦子) (2011) *Referring Expressions in English and Japanese*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

FORUM

◆CL2011 参加報告

内田富男（明星大学）

tutida@ge.meisei-u.ac.jp

Corpus Linguistics 2011 (CL2011) 参加のためにこの夏、訪英する機会を得ました。CL は著名なコーパス言語学者の講演や国際レベルの発表を聞くことができるということで、遠方ではありますが思い切って参加しました。また折角の機会ですので拙いポスター発表もさせていただきました。

CL2011 は、バーミンガムでの開催で、7 月 20 日から 22 日までの 3 日間で行われました。20 日の開会式と Susan Hunston 氏による plenary speech に始まり、最終日の 23 日までバーミンガム国際会議場 (International Conference Centre, ICC Birmingham) には、英国内はもとより近隣の EU 諸国や日本を含むアジア各国・地域から多数の参加者が集まりました。

CL2011 のテーマは “Discourse and Corpus Linguistics” です。今回の招待講演者はお馴染みのお三方で、まず開催地バーミンガムから Susan Hunston 氏 (University of Birmingham), 次に、Paul Baker 氏 (Lancaster University) が講演し、大

会最終日には、Stefan Th. Gries 氏 (University of California, Santa Barbara) が大きな本会議場で discourse あるいはレジスターに関する講演を行いました。各講演者 (敬称略) の演題は以下の通りです。“Doing Analysis in Discourse and Corpus: the case of Evaluative Language” (Hunston S.), “Discourse, news representations and Corpus Linguistics” (Baker, P.), “Quantitative and exploratory corpus approaches to registers and text types” (Gries, S.T.).

そして、130 件を超える full paper をはじめ、ワークショップ、コロキウム、Pecha Kucha が大ホールも含め 7 室に分かれて行われました。5 件のワークショップのうち、特に discourse をテーマとしたものには Eva Hajicova (Charles University in Prague), “Annotation of Discourse Relations in Large Corpora” がありました。2 件のコロキウムは、Michael Handford (Tokyo University) 他 4 名による “Professional discourse and corpora” が discourse を主題とし、もうひとつは、レジスターを扱った Tony Berber Sardinha (São Paulo Catholic University, Brazil) 他 5 名による “Recent Perspectives on Multi-Dimensional Analysis” がありました。そして 5 件あった work-in-progress の研究として Pecha Kucha の中で discourse 関連の発表は次の 2 件でした。John Flowerdew (City University of Hong Kong), “Small corpora, larger corpora and discourse analysis in the study of lexical cohesion,” Coral Calvo Maturana (University of Granada, Spain), “Jackie Kay’s poetic discourse: A corpus stylistics research.”

口頭発表等に使用された会場の中には、広さや席数が十分でなく、多くの聴衆が参集した部屋ではやや狭く感じられ、スライドの位置が低く見にくい部屋もありました。発表室を出てすぐのところにあるフォワイエでは discourse 研究に加えて、広くコーパス言語学に関連するバラエティーに富んだ 30 件余りのポスターをゆったりと見ることができました。ただし、2 件のポスターを縦に 1 枚のボードに張るため下に張られたポスターは見にくく、発表時間には上下 2 件のポスター発表者が同時に説明をする場合、聴衆が入り混じり、聞きにくいようでした。

日本人あるいは日本から参加した発表者は 10

名程度でした。発表者のお名前 (敬称略) と所属、発表タイトルは次のとおりです。本学会東支部長投野由紀夫氏による発表 Tono, Y. (Tokyo Univ. of Foreign Studies), “Identifying new verb co-occurrence patterns as criterial features: Using ICCI and JEFLL” を始め、Anthony, L. (Waseda Univ.), “Introducing Corpus-Based Methods into a Large-Scale Technical Writing Program for Scientists and Engineers,” Miki, N. (Kansai Univ. of International Studies), “Key Colligation Analysis: Discovering stylistic differences in significant lexico-grammatical units,” Murakami, (Univ. of Cambridge), “Cross-linguistic influence on the accuracy order of English grammatical morphemes: Insights from a learner corpus,” Usami, H. (Lancaster), “How can corpora improve multiple choice grammar questions with possible answers?” Kobayashi, Y. (Osaka Univ.), “A Corpus-Based Approach to the Unnaturalness of Non-Native Metadiscourse,” Kojima, M. (Gifu City Women’s College), “An argument-based approach to validate S: A newly developed measure of lexical richness,” Uchida, T. (Meisei Univ.), “Investigating Formulaic Use of Of-phrases by Non-advanced Learners: Findings from a Japanese EFL Learner Corpus.”

Lunch や tea & coffee の時間も国際会議の楽しみのひとつですが、CL2011 も例外ではなく、用意された部屋では常に友好的で温かな雰囲気の中参加者同士の交流が図られ、tea cup を片手に、ビスケットをつまみながら著名な研究者と直接話をする姿があちらこちらで見られまし



休憩・軽食のために用意された部屋 (出版社のブース 10 社ほどあり)

た。

筆者の関心の高いテーマに関する発表で、特に印象に残った発表をひとつだけ紹介します。

Rosamund Moon (Department of English, University of Birmingham) & Carmen Rosa Caldas-Coulthard (Centre for English Language Studies, University of Birmingham) による “Ageing with the corpus” です。まずその短い 4 語のタイトルが潔いと思いました (ただし “An Academic Collocation List” (K. Ackermann, D. Biber, & B. Gray) も 4 語)。

Moon 氏の opening remarks は超満員の聴衆席を笑わせてくれました。自分もこんなことが気になる歳になった、といった趣旨でした (余談で、私事ですが、本稿の脱稿の前日、筆者自身もひとつ歳を重ねてしまいました)。

さて、発表内容は、言語におけるエイジ・エイジング並びにジェンダーにおけるステレオタイプに関するコーパス研究です。本研究では age インジケータとして *young* と *old* を、ジェンダーマークとして *man* と *woman* を用いて共起形容詞を調べたところ、*young* の共起語は肯定的な語 (例 *beautiful*)、*old* のそれは否定的な語 (例 *sick*) である点が先行研究と一致することを確認しました。

調査結果を一言で纏めると、メディア等における年齢とジェンダーに対するステレオタイプは伝統的な社会的役割・期待等を投影する、という言語学的証拠が得られたということです。そしてこの調査結果は、今回参照したコーパス



ポスター発表を聞く海外からの参加者 (手前) 中央は筆者、奥は EU からのポスター発表者 (写真提供 村上明氏)。

を超えてデイスコース分析においてベンチマークとして使えるだろう、と締めくくりました。

CL2011 のプログラムの詳細、アブストラクト、過去の大会の発表内容については CL のホームページ内のアーカイブで見ることができます。

<http://cl2011.org.uk/> (本大会) 及び <http://cl2011.org.uk/archives.html> (アーカイブ)。

最後に、今回の CL では、英国滞在 4 日間という駆け足でしたが、コーパス言語学の広がりとお興行きの深さを実感させられた国際カンファレンスでした。CL は隔年開催ですので次回は CL2013 となります。CL2013 は 7 月 23 日～26 日の 4 日間、Lancaster 大学で開催される予定です。再び機会に恵まれ CL2013 にも参加できればと思います。

大会最終日にあたる 3 日目は早朝からあいにくの強い雨、会場の ICC に向かう途中、定説に反して雨傘を差す英国紳士達の姿があったことも併せてご報告いたします。

◆国際会議開催報告：Osaka Symposium on Digital Humanities 2011

田畑 智司 (大阪大学)

tabata@lang.osaka-u.ac.jp

2011 年 9 月 12-14 日、大阪大学大学院言語文化研究科にて国際会議、Osaka Symposium on Digital Humanities 2011 (OSDH2011) が開催された。この催しは当初 3 月 28-29 日に予定していたものだが、東日本大震災、およびそれに起因する福島第一原子力発電所災害の影響により延期を余儀なくされ、約半年遅れての開催となった。

まだあまり馴染みのない方のために、“digital humanities” がどのようなものか、まず最初に簡単に紹介しておきたい。Wikipedia には digital humanities について次のような記述がある。

The digital humanities, also known as humanities computing, is a field of study, research, teaching, and invention concerned with the intersection of computing and the disciplines of the humanities. It is methodological by nature and interdisciplinary in scope.

Digital humanities は広範な学術領域をカバーしているのに加え、各領域には異なる学問の文化や伝統があるため、統一的な定義を与えるのは容易ではない。とはいえ、たいへん大雑把な定義をするならば、「コンピュータを有機的に組み合わせたデジタル時代の人文学、デジタルツールの活用によって初めて可能となるような人文

学の諸問題に取り組む学術領域」だと言えるのではないだろうか。Wikipedia の記述にも見られるように、従来、この分野は “humanities computing” と称されていた。しかし、21 世紀に入り、米国・カナダ・欧州に本拠を置くコンピュータを活用した人文科学研究・教育の普及・推進に取り組む 3 つの学協会が ADHO (Alliance of Digital Humanities Organizations) という傘組織を形成するのに歩調を合わせて、当該学術コミュニティでは戦略的に、“digital humanities” という用語を前面に押し出し始めた。Humanities computing から digital humanities への呼称の転換、文法的な言い方をすれば “head” が computing から humanities へ移ることで、「人文学」にあらためてフォーカスが置かれたと言えるだろう。これによって、デジタル時代、デジタル環境下の人文学という認識が新たにされたのだと筆者は解釈している。

さて、話を OSDH2011 に戻すと、このシンポジウムは 2009 年に東京大学文学部次世代人文学開発センター、および 2010 年に大阪大学大学院言語文化研究科を会場に行われた Digital Humanities Workshop を発展させた企画であると共に、日本学術振興会および British Academy の二国間交流事業の助成を受けて 2009 年度より本研究科と英国 King’s College London, Centre for Computing in the Humanities (CCH, 現 Department of Digital Humanities (DDH)) との間で進めてきた共同研究「多変量文体分析モデルによる 19 世紀英国新聞の計量分析研究」の成果発表の場として構想

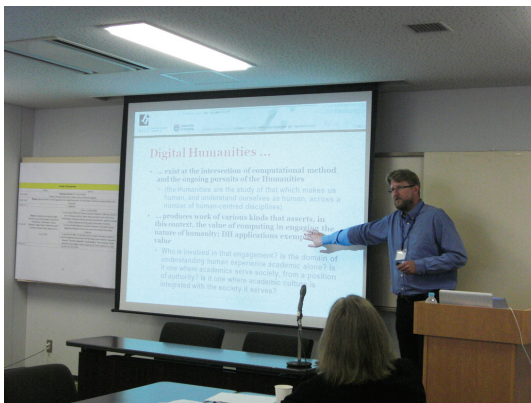


図 1: Ray Siemens 氏による基調講演



図 2: 筆者らによるパネル討論

した企画であった。しかし、実施計画を検討する過程で、共同研究グループと交流のある国内外の研究者から、大阪でそのようなイベントが開催されるのなら自分達も是非参加したいという声が寄せられ始めた。ちょうど時を同じくして、わが国でも本格的な digital humanities の研究・教育に関わる学協会を組織し、digital humanities の普及・教育を推進する海外の研究機関や学協会との国際連携へ向けた環境を整備しようという機運が高まっていた。そこで、この機に The Japanese Association for Digital Humanities が組織され、このシンポジウムを設立記念大会にすることがトントン拍子で決まって行った。さらに、欧州に基盤を置く学協会 The Association for Literary and Linguistic Computing が、ワークショップ講師二名を欧州から招聘するための費用面で協力をしてくれることとなり、ワークショップ + 研究発表 2 日間の計 3 日間の日程で会議を開催することとなった。

大会には、欧州、北米、豪州、台湾から 18 名が来日したほか、国内約 30 の研究機関から 64 名が集い、計 82 名の参加があった。筆者の記憶が正しければ、その中には、本会の会員では、阿部真理子氏 (高崎経済大学)、小原平氏 (慈恵会医科大学)、谷明信氏 (兵庫教育大学)、千葉庄寿氏 (麗澤大学)、野ロジュディ氏 (武庫川女子大学) らの顔があった。初日のワークショップでは、二つのコースが提供された。一つはカスタマイズド・コーパスの作成とそれを用いたテキスト分析に焦点を当てたものであり、もう一つは文献のデジタル化・デジタル校訂に関する

ものであった。前者のコースはドイツ・ハンブルク大学の Jan Christoph Meister 教授（ナラティブ理論，文献学，テキスト分析）とフィンランド・オウル大学の Lisa Lena Opas-Hänninen 博士（英語フィロロジ）が担当し，ハンブルク大学で Meister 教授監修のもと開発された電子文献マークアップ・テキスト分析用統合ツール，CATMA（Computer Aided Textual Mark-up and Analysis）を用いて，テキストの構造や話法，構文，意味カテゴリなどのメタデータを効率的，かつ体系的にテキストデータに付与する方法が解説された。続いて，編集したデータの特徴を視覚的提示し，テキスト分析に繋げるノウハウが二人の講師から披瀝されていた。もう一つのコースを担当したのは，アイルランド・トリニティコレッジ・ダブリンの Susan Schreibman 博士である。彼女のワークショップでは，米国メリーランド大学やトリニティコレッジ・ダブリンを中心に開発されている文献比較表示用 Web アプリケーション Versioning Machine の主要機能の解説を一通り行われた後，参加者それぞれが持参のラップトップで，Versioning Machine に文献を読み込ませ，比較，校訂作業などを行う一連のプロセスを講習した。いずれのコースにおいても，日本ではまだ余り馴染みのない最新のツールの紹介，機能の解説とそれを活用したハンズオン形式の実習から組み立てられており，参加者は Digital Humanities 最前線の動向を体験する良い機会となったようである。

大会 2 日目，3 日目には 3 点の基調講演も行われた。登壇順に，カナダ・ヴィクトリア大学の



図 3: OSDH2011 会場の様子

Raymond Siemens 教授（英文学）による “Social Engagement in the Digital Humanities: An Intervention in Electronic Scholarly Editions and E-Journals.” 前述のオウル大学 Lisa Lena Opas-Hänninen 博士は “The Future of Digital Humanities—Tools and Visualization” と題した講演を行い，同じく DH の先進国ノルウェー・オスロ大学の Espen S. Ore 氏（電子出版）は “From black magic to Henrik Ibsen—or Digitizing culture: books, images and manuscripts” の標題で講演した。いずれの講演でも DH の the state of the art が示されると同時に，現状の技術・方法論・制度面の限界や制約，喫緊の課題や将来の展望が明示されたのはとても意義深いことであった。また，2 日目の夕方には，ポスターセッションが行われた。このセッションの始めには，ポスターの発表者が 1 分間の制限時間で，各々の研究のハイライトについて喧伝する “Poster slam” という時間が取られた。1 分間という極めて短い時間の中で，研究の要点について語るのとは容易なことではないだろうが，研究活動の意義や結果を，社会や研究助成金の funders に対していかに明瞭に説明するかという，説明責任に対する取り組み方の一つとして大いに参考になるものであった。

口頭発表セッションでは，3 件のパネルディスカッションと，21 件の論文発表がなされた。（基調講演，ポスターを含め）扱われたテーマは，写本研究，文学，コーパス構築，文体統計論・計量言語学，自然言語処理，史学，（図書館）情報学，文化遺産のデジタル化，人文学への AR（Augmented Reality，拡張現実感）や GIS（Geographical Information System，地理情報システム）の導入など多岐に渡る。蛇足ながら，筆者は共同研究グループの同僚，三宅真紀氏，本会会員で本学博士後期課程の小林雄一郎氏，King’s College London の Harold Short 教授，Gerhard Brey 氏，Miguel Vieira 氏と共にパネルディスカッション “Statistical text-mining on *English Woman’s Journal*” を行い，学振・BA の二国間共同研究の総括の場を得ることができた。

また，本シンポジウムではアカデミックプログラムだけではなく，大小二回のレセプション，最終日の茶会，ディナーなど，参加者間の

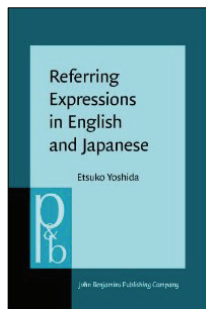
懇親の場を提供するソーシャルプログラムも充実を図るべく務めた。特に、雲中庵 宮武 慶之氏と同志社大学・矢野 環教授による茶の席は海外からの参加者に大好評であった。希望者には自分でお茶を点ててもらおうという、一種の日本文化体験ワークショップとしてこのイベントを満喫してもらえたことは発案した私達としては望外の喜びでもあった。なお、第二回の DH シンポジウムは、来年9月15-17日に、会場を東京大学本郷キャンパスに移して開催されることがすでに決定している。欧州、北米で開催される Digital Humanities conference にはコーパス言語学の研究者も多数見られるように、コーパス研究やコーパス構築は digital humanities の中核を成す領域の一つでもある。これまでまだあまりこの分野に馴染みのなかった方々にも今後関心を持っていただければ幸いである。

◆新刊紹介

谷村緑 (京都外国語大学)

m_tanimu@kufs.ac.jp

Yoshida, Etsuko (2011) *Referring Expressions in English and Japanese: Patterns of Use in Dialogue Processing*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. (Pragmatics & Beyond New Series 208) 206 pp. EUR 90.00 / USD 135.00
ISBN: 978-90-272-5612-6 (Hardbound)
ISBN: 978-90-272-8665-9 (e-Book)



本書は、自発的な発話から構成された日英語の対話コーパスに基づき、指示表現の選択と分布の様相を分析し、日英語の指示体系について論じたものである。談話の局所的結束性の強さを測るために、センタリング理論 (Grosz, Joshi and Weinstein 1995) という談話理解モデルを導入して分析し、談話の展開に応じて、話題となる要素がどのように推移し、それらが談話の一貫性の形成にどうかかわっているのかについて考察したものである。

本書は、2008年にエディンバラ大学言語学科に氏が提出した PhD 論文が土台となっており、序論を含め以下の9章から成っている。

- 第1章 Introduction
- 第2章 Approaches to referring expressions
- 第3章 Approaches to deictic expressions
- 第4章 Data collection
- 第5章 Centering and dialogue
- 第6章 Referring expressions and local coherence of discourse
- 第7章 Referring expressions and global discourse structure
- 第8章 Collaborative nature of referring and structuring in discourse
- 第9章 Conclusion

第1章では、導入として、日本語の指示体系は、形式と機能において英語と異なることを例解し、意味との対応関係を踏まえた分析が必要であると述べられている。

第2章では、指示表現の研究に関する先行研究が紹介され、指示表現の選択と談話構造との関係を捉えた方法論の必要性が説かれている。そして、相互作用を基盤とする対話的談話は、通常の語りの構造と比べてより複雑な構造をとるため、曖昧性を避けて非代名詞系の指示表現が継続しやすいのではないかと予測する。

第3章では日英語の直示表現の3つの側面として、空間的直示、照応的直示、談話直示をとりあげ、対話コーパスにおけるこれらの分布を概観している。結果は特定の指示対象を探索するのに用いられる照応的直示が優位であり、日本語のソ系指示や英語の *that* 指示は、直前の対象を指示する照応機能だけでなく、談話単位を越えて長距離の対象にもアクセスし、新たな談話単位の始まりを予測させる役目もあることが示されている。

第4章は対話コーパスデータの紹介である。本書で利用されたコーパスは、1990年代にエディンバラ大学で開発された大規模な対話コーパスプロジェクト (HCRC 地図課題対話コーパス) の一部である。とくに対照研究の目的で、2000年以降日英語それぞれ新たに収集された小規模なコンパラブルコーパス (日英各8対話) が分析の対象である。この新しい対話データは、地図上の目標物に名前をつけていない地図を使用した点でオリジナルコーパスと異なっ

おり、2名の対話者は互いに協力して地図上の目標物の名前を決定しながら対話を進めることが求められる。このため、課題はオリジナルよりも対話者の協同作業においてより難しくなり、指示表現の形式に多様性が生まれ、流暢さの失われる傾向がますます強まる結果になっている。

第5章は分析のための道具となるセンタリング理論の概要とそれをどのように対話データに応用するかという点から議論されている。センタリング理論とは、談話における局所的な照応現象をモデル化するために提案されたものである。局所焦点の推移を観察すると、談話の一貫性を判断する手がかりを得られると同時に、談話構造の階層性に注目して大局焦点の推移を予測することも可能になる。

第6章は、話題となる要素の導入から定着するプロセス、別の要素へと推移するパターンを分析した結果、日英語の指示表現の形式的違いにもかかわらず、談話の展開の仕方には類似性が認められた。そして、局所焦点には(ゼロ)代名詞が、大局焦点には名詞句を中心とした連鎖パターンが顕著であることが明らかになった。

第7章は、第6章での結果をふまえ、「談話における名詞句の選択と分布が談話単位内部の局所的な結束性とどまらず、談話単位をこえた談話の大局的な一貫性とも深くかかわっている」という仮説を検証するため、センタリング理論を拡張したキャッシュモデルを援用することを試みた。

第8章では、指示するという現象を協同的な相互行為としてとらえる立場から、新しい談話要素の導入部分の言語現象と、定着した名詞句の生起パターンについて Clark and Wilkes-Gibbs (1986) の類型に基づく分析をおこなっている。定着した談話要素は名詞句の形式で対話者間で繰り返され、修正が加えられ、共有情報へと集積されていくグラウンディング過程を示していると論じている。

最後に、第9章では全体のまとめと今後の研究の展開について述べられている。センタリングモデルおよびキャッシュモデルの対話分析への応用は、今後も修正拡張の余地があるとはい

え、本書は語用論的視点からの指示表現の現象解釈と計算言語学的アプローチとを融合させる手法による研究成果といえよう。とりわけ、理論の検証という点から、対話コーパスは自然でかつ多様性に富み、対話研究に欠かせない言語資源であることが強調されている。

このように本書は、談話のトピック維持における指示表現のパターンに焦点を当てた実証的研究として、談話、語用論、コミュニケーション、計算言語学等を専門とする研究者に有用な1冊である。従来の指示詞・代名詞研究においては、個別言語(主に英語)を対象とし、書きことばや独話(ナラティブなど)の調査が中心で、類型論的に対話者間の相互行為を考慮したものはほとんどなかった。本書の学問的意義は、トピックを維持する際に使用される指示表現の使用分布と対話構造との関係を日英語において比較・対照することで、従来指摘されてこなかった名詞句表現の役割を明らかにした点である。

特に、日本語の談話において一貫性維持を担う裸名詞の役割を、コーパスデータからボトムアップ的に発見した功績は大きい。従来、日本語における指示表現の研究は、読み手の文章理解における照応関係の理解過程説明が中心(例えば阿部他 1997)であった。一方、話しことばでは、Clancy (1980) や水谷 (2001) などの研究成果があり、非常に直感と合う先駆的な研究として評価されてきた。しかし、本書のように言語産出者が対話の様々な局面で、どのような指示表現を選択していくかといった観点から詳細に分析されているわけではない。日本語においては、固有名詞のようにふるまう裸名詞が談話セグメントを越えて対話の一貫性に貢献し、ゼロ代名詞は談話の局所的なトピックの維持にのみ使用されるという結果は、重要な意味を持つ。また、日本語におけるトピックの維持は、照応的に指示詞の「ソノ+名詞」の形で結束するのに対し、英語では直示的に指示代名詞 that の形をとることが統計的に示されたことも興味深い。

分析手法も妥当である。本書で利用されているセンタリング理論は、遷移パターンの違いに

基づき、統計的・客観的に一貫性の高さを測ることができるだけでなく、照応詞の候補認定がスケール上で厳しく規定されているため、焦点化される談話要素が特定可能となる。このことから、Givón (1983) や Ariel (1990) が十分に説明できなかった、「距離が離れても曖昧さが生じない文脈では代名詞が連続して使用されるはずだが、代名詞と固有名詞が混在して生起する実例」や、逆に「競合する指示表現があっても理解可能な文」などを説明できるようになる。一方、センタリング理論には限られた現象を局所的にしか説明できないという弱点もあるが、本書は、大局的に一貫性を説明するためのキャッシュモデルを援用することでこの弱点を補っている。

以上のように、本書の研究成果をきっかけとして、対話コーパスに基づく複数言語の対照研究がさらに進められていくことを大いに期待したい。

最後に今後の対話コーパスの利用について一言述べておきたい。コミュニケーションのメカニズムと理解プロセスの解明を追究する対話研究にとって、対話コーパスは自然な発話データの宝庫である。しかしながら、その分析手法や利用に関する研究は複数の研究領域に分散しており、統合的・体系的に扱う方法はいまだ確立されていない。対話コーパスの利用価値を高めるために、今後望まれることは多いが、小規模の対話コーパスを調査して共通の基本情報を付与し、相互利用可能な形で共有することが急務であり、将来的な大規模対話コーパスの構築へとつなげることがさらなる課題である。

参考文献

- Ariel, M. (1990) *Accessing Noun-Phrase Antecedents*. London: Croom Helm.
- Clancy, P. (1980) "Referential choice in English and Japanese narrative discourse." *The pear stories: cognitive, cultural and linguistic aspects of narrative production*, W. L. Chafe (Ed.), 127–202. Norwood, NJ: Ablex.
- Clark, H.H. and Wilkes-Gibbs, D. (1986) "Referring as a collaborative process." *Cognition* 22, 1–30.
- Givón, T. (1983) *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross Language Study*. Typological

Studies in Language 3. Amsterdam: John Benjamins

Grosz, B. J., Joshi, A. K. & Weinstein, S. (1995) *Centering: A framework for modelling the local coherence of discourse*. IRCS Report 95-01, University of Pennsylvania.

阿部純一・金子康朗・桃内佳雄・李光五 (1997) 『人間の言語情報処理—言語理解の認知科学』 (Cognitive Science Information Processing) サイエンス社。

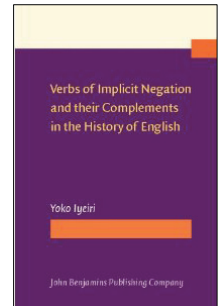
水谷信子 (2001) 『続日英比較 話しことばの文法』 くろしお出版。

◆文献紹介

深谷輝彦 (椋山女学園大学)

fukaya@sugiyama-u.ac.jp

Iyeiri, Yoko (2010) *Verbs of Implicit Negation and their Complements in the History of English*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. 223 pp. EUR 90.00 / USD 135.00
ISBN: 978-90-272-1170-5 (Hardbound)



本書は、否定を含意する英語動詞 (e.g. *forbid, avoid, prevent, fear*) が補文として *that* 節, *to* 不定詞, 動名詞のいずれを従えるのかという基準で、各動詞の英語史的発達パターンを主に OED 例文コーパスからのデータで実証している。その際に次の補文推移が想定される。

(1) 第一次補文推移

中英語後期から近代英語前期に起きた *that* 節から *to* 不定詞への推移

(2) 第二次補文推移

近代英語後期に見られた *to* 不定詞から動名詞への推移

この補文推移の枠組みのなかで、否定含意動詞が (1) と (2) に沿った補文推移をみせるのか、時には見せずに別の道を歩むのか、という疑問を追いかけてながら、帰納的にデータを積み上げる論証の過程こそが、本書の最大の魅力である。

Introduction に続く本論は次の構成となっている。コーパス調査する動詞も併記する。

2. Verbs of implicit negation and to-infinitives (*forbid/refuse*)
3. Verbs of implicit negation and gerunds (*forbear/avoid*)
4. Verbs of implicit negation and gerunds with prepositions (*prohibit/prevent/hinder/refrain*)
5. Verbs of implicit negation and subordinate clauses (*fear/doubt/deny*)

そして最後に Chapter 6 の Summary and conclusions で結語としている。

Chapter 2 では *forbid* と *refuse* の補文を扱う。このうち、*forbid* は近代英語前期に *that* 節から *to* 不定詞へという第一次補文推移を達成していることが、OED 例文コーパスおよびヘルシンキコーパスからの資料で提示される。*to* 不定詞から動名詞の推移という面では、依然 *to* 不定詞が最大頻度示すものの、動名詞も出現し始めている。*forbid* の用法のうち、*God forbid* がとても関心を引く。この構文の特徴として家入氏は次の二点を指摘する。

i) 本来の *forbid* では、*that* 節中に虚辞否定の *not* が頻繁に観察できるが (Great Bible (1540)), *God forbid that . . .* には該当例がない。ii) *God forbid* と *that* 節の間に間接目的語が生起しないという意味で、英語史上、固定している。こういう個性ゆえに、普通の *forbid* が *that* 節から *to* 不定詞、*to* 不定詞から動名詞という補文推移を経過しているにもかかわらず、*God forbid + that* 節は本来の *forbid* に合流せず、現代英語に化石のように生き残っている、と説く。

Chapter 3 が扱うのは、現代英語で動名詞補文が主流である *forbear* と *avoid* である。*forbear* は (1), (2) の補文推移に倣うものの、近代英語で動名詞興隆の環境として否定的な文脈が際立つ。なかでも *cannot [could not] forbear + -ing* という構文が、*forbear* の動名詞補文の受け皿となっているという。他方、OED 例文コーパスによれば、*avoid* は 16 世紀こそ *that* 節、*to* 不定詞、動名詞が混在するも、18 世紀には動名詞補文へ完全移行している。現代英語で同じ動名詞補文を取る動詞ながらその補文推移に差が生じ

る一因として、アングロサクソン語である *forbear* とフランス語からの借用語である *avoid* という起源の違いをあげている。つまり、*avoid* は英語への参入が遅かった分、*forbear* のように補文推移の第一次と第二次という段階を追わず、動名詞に移行したと見ている。

家入氏が Chapter 3 で取り上げる *horror aequi* 原理と *avoid* 補文の関連もぜひ注目したい。*horror aequi* 原理とは、同種の不定形の連鎖を避ける傾向をさす。例えば、*avoiding -ing* というような *-ing* の連続より、*to* 不定詞 + 動名詞が実現した *to avoid -ing* という連鎖が好まれる。もし *horror aequi* 原理が有効だとすると、*avoid* の動名詞補文が安定すればするほど *avoiding + 動名詞* ではなく、*to avoid + 動名詞* が期待される。そして OED コーパスは、*avoid* 動名詞補文の発達に合わせるかのように、補文をとる *to avoid* の割合が 16 世紀の 36.4% から 20 世紀の 64.3% と着実に増加していることを示す。このように著者は、*avoid* の補文だけでなく、その補文推移を促進する要因にまで目配りする。

次の Chapter 4 は、*prohibit/prevent/hinder/refrain* という *from* 動名詞を補文にとる動詞を調査対象とする。本章の *from* 動名詞補文は、Chapter 3 の動名詞補文をさらに一歩進めた補文推移であるという。これら四動詞のうち、*prohibit* は第一次補文推移、第二次補文推移の文句なしの証拠を提供する。OED データによれば、17 世紀には *to* 不定詞へ、19 世紀、20 世紀には動名詞へ推移している。これに対して *prevent* は、16 世紀段階ですでに動名詞が高頻度となり、17 世紀では動名詞補文が安定期に入っている。そこで家入氏の議論は、*prevent* 補文の変種の区分けに向かう。すなわち、i) *prevent + possessive + -ing*, ii) *prevent + object + -ing*, iii) *prevent + object + from + -ing* の分布の違いを英語史の視点から探る。その成果の一つは、*prevent* に後続する目的語が代名詞か名詞かという区別が動名詞補文推移と英語史的にリンクしている点である。OED のデータで見る限り、目的語が代名詞である場合に i) の *prevent + possessive + -ing* 構文が長く維持され、名詞になると ii) または iii) の *prevent + object + (from) + -ing* 構文が圧倒的とな

る。この背景に動名詞の主語として所有代名詞形が好まれる傾向があるのは、言うまでもない。

本論最後の Chapter 5 では *fear/doubt/deny* という 3 動詞の補文推移を追求している。ここで家入氏が *fear* をどのように分析するか、紹介する。*fear* 全体だけを見ると、*that* 節補文の優勢が 16 世紀から 20 世紀に継続しているという流れしか見えない。しかし、*fear* が現れる文を肯定文と否定文に分けてやると、その歴史的補文推移はより正確な姿を見せてくれる。否定的文脈の *fear* は、*that* 補文から *to* 不定詞、*to* 不定詞から動名詞という補文推移のルールに沿った補文変化をしている。対して肯定文での *fear* は、*that* 節が補文の位置を独占している。そして、さらに興味深いことに、肯定文の *fear* は *to* 不定詞への推移という道を選ばずに、代わりに *I fear* の挿入用法を発達させる。(e.g. *Take my armour of quickly, 'twill make him swoune, I feare.*) 具体的には、*I fear that . . .* の *that* の省略、さらに補文文中や補文文末への移動により、*that* 補文が主節への位置へ格上げされ、*that* 節の衰退という通時的变化の力を交わすことに成功する、と説明する。

本紹介で最後に言及したいのが、OED コーパスの有用性と問題点に関する家入氏の指摘である。これまでの否定含意動詞の補文推移調査で明らかのように、英語辞書である OED で引用される例文は英語の史的研究にとって有用で優れた言語資料になりうる。しかしその問題点も常に意識しなければならない、と家入氏は繰り返

し慎重な姿勢を求める。Introduction の一節をデータ検討に当て、OED を言語分析用コーパスとして見立てるときの難点を列挙する。

i) OED の例文は文学作品というジャンルからのものが中心である。

ii) 例文の時代的偏向が際立つところがある。

(例, Shakespeare の前後)

OED の例文全体の性質や構造だけでなく、実際の補文推移分析でもデータ面で問題に遭遇することがある。例えば、*forbear* の第二次補文推移を論じる際に、19 世紀、20 世紀からの例文が不十分で現代英語での動向が明確にできないという。同様に、*avoid* の 16 世紀からの補文引用が 11 例しかなく、十分な論拠となり得ていないので、データの解釈は慎重にという警告をだす。もちろん、家入氏はヘルシンキコーパスや聖書コーパスのような通時的コーパスで追加調査も行っている。また BNC や Brown ファミリーコーパスのような現代英語コーパスも積極的に活用し、現代英語の動向にも気配りをしている。

家入氏の研究の主眼は、OED 例文コーパスを最大活用しながら、否定含意動詞の補文推移を特徴づける第一次、第二次補文推移を例証することにある。それと同時に、コーパスデータを量的、質的に精密に分析し、補文推移の詳細にまで分け入る労苦を厭わない。そういう意味で、英語コーパス研究者にとって、本書の読後の満足感はとても高い。ぜひ一読を薦めたい。末筆ながら、本書は 2011 年度英語コーパス学会賞を受賞している。